

## 小学生にも魅力的な“高校”!

### ●浦高は今!!

皆様のお手元に4月中旬に会報「麗和」が届いていると思いますが、表紙の修学旅行写真の中に私たちの25回生が映っているのをご存じでしょうか? 時代の変遷を感じるとともに、40年前にもピースサインが流行っていたのですね。

さて、5月26日(日)は午後から浦高同窓会総会が浦和ロイヤルパインズホテルにて開催されます。今回の総会では、**創立120周年事業として「県立浦和高等学校同窓会奨学財団」の設立**について議案が提案されます。時代の先駆けとしてグローバル社会での人材育成を同窓会が応援しようというものです。多くの皆様方の賛同をいただき、事業が大きく飛躍することを祈ります。

そんな母校・浦高の今をお伝えするには**関根郁夫前校長**の日経新聞(4月8日)の記事が良いと思いますので引用してご紹介させていただきます。

＊

### ◆公立高 小学生に魅力PR 浦和高校前校長 (埼玉県教育委員) 関根郁夫【写真①】



公立高校の人气が復活しつつある中、埼玉県立浦和高等学校が小学生の保護者を対象に初の学校説明会を開いた。4月から埼玉県教育委員に就いた関根郁夫前校長に狙いを寄稿してもらった。

◇ ◇

今年2月、始めて小学生の保護者向けに学校説明会を開いた。100人近い参加者があり、浦和高校の教育内容や公立高校の現状を説明後、授業を見学してもらった【写真②】。

◆リーマン・ショック前の2008年、埼玉県内から東京都内の私立中学への進学者数は約2,260人と過去最多を記録、進学率は3.4%(男子2.7%、女子4.2%)に達した。同年を境に進学率は減少に転じ、12年は約1,200人、1.8%(男子1.1%、女子2.6%)となった。◆この公立回帰ともいべき流れの背景には、不況による経済的理由や東日本大震災の教訓から災害時の帰宅難民への不安の高まりなどがあるが、公立高校の教育力を高める努力が評価されたことも一因だろう。◆中学受験のために夜遅くまで塾に通う小学生の姿を見るようになって久しい。難関



大学の合格者数を学校の目標に掲げる高校も増えた。しかし、小学生から高校生まで10年近くも、問題が与えられ、答えが一つだけ存在する受験問題を解く学習に没頭してよいものだろうか。受験技術の詰め込みが小学生に必要な教育とは思えない。◆しかも、早生まれや奥手の子供にとって、小学生のうちに進路を決めることには無理がある。子供が持つ能力を引き出すには、もう少しゆっくりじっくりと小学生時代を過ごさせる必要がある。

◇ ◇

現在は時代の転換期である。新しい価値や方法を生み出す人が必要とされる時代だからこそ、仲間と本気でかかわりながら能力を引き出す教育を大事にしたい。その延長上で、希望する大学への入学を果たさせたい。そんな思いで公立高校の校長を務めてきた。◆公立高校の魅力とはなんだろうか。浦和高校では「世界のどこかを支える人間となれ」「少なくとも、勉強、部活動、学校行事の三兎(と)を追え」「無理何台に挑戦せよ」を合言葉に生徒を鍛えている。これは、多くの公立高校が取り組んでいることでもある。◆浦和高校の3年間は、茶道や武道でいう「守破離」で表すことができる。1年次は「守」。浦和高校の型を身につける時期である。予習、授業、復習の学習法を体得し、学校生活のあり方を学び、部活動と学業の両立をめざす。2年次は「破」。挑戦する時期である。型を体得した上で、さらに自分の可能性を追求する。学習にしっかり取り組みつつ、部活動や行事、委員会活動など、やりたいことやなすべきことに全力で取り組む。3年次は「離」。自走する時期である。独り立ちし、将来に向けて自分自身の道を歩み始める。◆生徒が守破離と進むための様々な仕掛けを用意している。再テストや誤答訂正ノートなどで「できないことはできるようにする」姿勢を徹底させる。実験や論文作成、ディベート、協調学習などの授業で幅広い教養や学問する力を育てる。新入生歓迎10キロマラソンや臨海学校の2キロの遠泳、50キロ強歩大会などは「あきらめない心身」の鍛錬である。早朝や放課後の自学自習で「学ぶ習慣」の定着と「学ぶ集団」の構築を目指す。◆さらには、卒業生による職業説明会や多彩な講演会による意識啓発。英国姉妹校との交換留学や米国大学のサマープログラム派遣による世界的視野の醸成。進路だよりや年次通信など励ましの言葉のシャワー。個人面談や個別検討会などを通じた生徒の状況把握。全国大会にも数多く出場する部活動……。これらを教員が主体的に工夫し、積み上げてきた。

◇ ◇

全国の公立高校は、優れた実績の高校を視察し、良さを吸収し合う。公立高校間の交流も盛んだ。浦

和高校も東京都立日比谷、西、千葉県立千葉、神奈川県立湘南の各高校と5校交流を勧めているが、深化・向上を目指し合えるネットワークも公立高校の魅力だ。◆こうした公立高校の魅力をもっと広く知ってほしいと思うが、私立は中高一貫教育が主流になっていて、中学生の保護者に訴え溜めだけでは不十分だ。そんな思いから始めたのが、小学生保護者向けの説明会なのである。説明会では、教育を巡る最近の動向として、高校教育改革の流れやグローバル化時代の大学入試制度を巡る議論、起業や大学が期待する人材像などを話した。◆高校選択の視点とした▽授業内容は教養優先か受験対策優先か▽部活動の活動制限は無しか有りか▽男女別学か共学か▽自主性重視か規律重視か▽大学進学指導は第1志望重視か現役合格重視か▽伝統の重みの有無——を示した(浦和高校はすべて前者)。◆さらに、高校入学までに、自信がある分野を持ち、じっくり考えられる力をつけることや、基本的な生活習慣や時間管理能力の定着、本気で取り組んだ経験を持つことなどを訴えた。メッセージは十分に伝わったと思う。◆浦和高校はこのほかに、年2回の教育活動説明会や隔週土曜日の授業公開・説明会など広報活動に力を入れている。ユニークなのは毎年12月の「小学生の冬休み特別教室」。浦和高校と県立浦和第一女子高校の生徒が、2日間の日程で小学生を教える。論語素読や星空案内、実験教室、寄席、邦楽邦舞など10の講座があり、毎年200人以上の小学生が参加する。学校だけでなく、高校生を知ってもらえる良い機会になっている。◆教育の魅力が社会にきちんと訴え、理解していただく。当たり前なのが公立高校にも求められる時代になったのである。

【日本経済新聞、4月8日】

\*

もう一つ、**関根前校長**の教育スタイル「**生徒褒め**」をご紹介します。

\*

#### ◆生徒褒め、励ます「はがき道」

子がかわいければ、五つ教えて三つ褒め、二つ叱って育てよという。政治家も役人も、学校には正反対のことばかりする。叱って、叱って、また叱る。だから、今年3月まで埼玉県浦和高等学校の校長を務めた**関根郁夫**(59)は、まず生徒を褒めようと決めた。褒め言葉は保護者の目にも触れた方がよい。それなら、はがきがうってつけだ。校長をした7年間で、生徒に贈ったはがきは合計2万枚に及び。

◇ ◇

きっかけは、**複写はがきを提唱していた坂田道信**の講演だった。病弱で満足に学校に通えなかった坂田は、教育者の**森信三**らに出会い、はがきを書くことを通して漢字を学び、人とのつながりの喜びを知

る。「はがきを書くことは教育だ」と訴えた。関根も複写はがきに一度は挑戦したが続かなかった。それから数年が過ぎ、校長になるのが決まった平成16年、坂田の言葉を思い出し、褒めて励ますはがきを生徒に書くことを思い付いた。◆褒める理由は、実にいろいろなところにあった。部活動での活躍や定期考査などでの成績優秀、皆勤賞はもちろん、文化祭や体育祭で頑張ったり、入学式で名前を呼ばれた時の返事が良かったりした生徒にも「はがきで表彰状」を贈った。はがきには、部活単位などの表彰を除いて生徒一人一人へのメッセージをつづり、特別にあつらえた校訓入りの印鑑を押した。まずは校長室に呼んで表彰式を開く。その場では手渡さず、ポストに投函した。◆すると、自宅に届いたはがきが保護者の目に触れる。学校での子どもの活躍を知って、家庭でいろんな会話が生まれたはずだ。生徒の親が、受け取ったはがきを職場の机に貼っているという話も耳にした。

◇ ◇

はがきを始めた当初は、校内の教員も困惑したという。◆表彰式まで開くのか。もらえない生徒は、どうするのか。◆関根は、頑張っている生徒の姿を校長が褒めてあげることが必要なのだとみんなに訴え、熱心に説いた。はがきの表彰状は時間をかけて少しずつ広まっていった。◆はがきを贈るのは、褒める時ばかりではない。未熟ささえ認められる高校時代、失敗や挫折はつきものだ。過ちを犯すこともある。試験で落第点を取ったり、問題を起こしたりした生徒には、励ましのはがきを贈った。◆謹慎処分を受けたある生徒へのはがきは、こう書き始めた。◆あなたは今、サナギから蝶へと脱皮する時期にいるのかもしれませんが。大きく変身しようとしているあなたへ、二つの言葉を贈ります。◆相手を変えることはできない 変えることができるのは自分だけ◆相手は自分の鏡 まず自分を変えること 自分を変えれば相手も変わる◆浦和高校在籍時の4年間で、贈ったはがきは1万枚、単純計算で1日7枚近くを書いたことになる。はがきを読み直すと、生徒との思い出がよみがえる。◆不登校で4年間、学校に来られなかった男子生徒のことをよく覚えている。◆定期試験は落第点扱いになるので、暑中見舞いと寒中見舞いの代わりに毎年、はがきを贈り続けた。生徒は結局、最後まで登校できなかったが、お礼の返事を書きながら、ポストに投函できなかったということの後日、生徒の母親からの手紙で知った。一度も学校に登校しなかったのに、いつも気に掛けてくれたことへの感謝の気持ちを伝えようとしていた。<後略。>【日本教育新聞、4月1日】

\*

素晴らしい前校長の精神が次の杉山校長にも…。